



万葉集卷七の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土田, 知雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000494

万葉集巻七の一考察

土田知雄

北海道学芸大学旭川分校国文学研究室

Chikao TSUCHIDA: A Study on 'Manyôshû' Vol. 7

I

万葉集の巻七は作者未詳の歌を収め、雑歌・譬喩歌・挽歌に分類し、雑歌と譬喩歌においては、さらに小題を置いて分類している。ここに注意すべきは、雑歌においては、「天を詠める」「月を詠める」「雲を詠める」等の詠物題、譬喩歌においては、「衣に寄する」「玉に寄する」「木に寄する」等の寄物題を小題にしていることである。これは、本巻編集の時代には、すでに作品の対象または譬喩の媒材に明かに品物を意識して来たことを示すものであろう。

しかし、巻七所載の詠物題の作品が、ことごとく始めからかかる題の下に詠まれたものであるとは言えない。例えば

この月の 此間に来れば 今とかも 妹が出で立ち 待ちつつあらむ (7-1078)

妹があたり わが袖振らむ 木の間より 出で来る月に 雲な棚引き (7-1085)

これらの作品は、月を主題にした詠物の歌というよりは、むしろ相間的抒情を基調としたもので、月はたまたまその手段として取上げられたものと言うべきであらう。

往かぬ吾 来むとか夜も 門閉さず あはれ吾妹子 待ちつつあらむ (11-2594)

未通女等が はなりの髪を 木綿の山 雲なたなびき 家のあたり見む (7-1244)

君があたり 見つつも居らむ 射駒山 雲なたなびき 雨は零るとも (12-3032)

2594番の歌は「正に心緒を述ぶる歌」中に収められ、次は「羈旅にて作れる歌」、次は「物に寄せて思を陳ぶる歌」に収められている。前掲の「月を詠める歌」をこれらに比較するに、一首の基調はさほど懸隔は認められず、特に詠物歌に収むべき理由は顕著でない。

同様の理由で、次の諸作の如きも詠物歌の中に収めるのは、その根拠が非常に薄弱である。

雨を詠める

徹るべく 雨はな降りそ 吾妹子が 形見の服 われ下に著り (7-1091)

河を詠める

さ檜の隈 檜の隈川の 瀬を早み 君が手取らば 寄らむ言かも (7-1108)

これらにおいては、雨や河を対象として詠んでいるものでないことは明かである。同じく「河を詠める」に

巻向の 痛足の川ゆ 往く水の 絶ゆることなく また反り見む (7-1100)

ぬばたまの 夜さり来れば 巻向の 川音高しも 嵐かも疾き (7-1101)

この両首について、¹⁾武田祐吉博士は、人麻呂の愛人の巻向の嬢子を彼が訪れた時の作であらうとされ、「表面には、巻向の痛足の川の忘れがたさを歌っているが、それは手段であつて、その川のほりに忘れかねる理由が存するのである。その人ゆえに、その川のいくかえり絶えることなく訪れられる。その内面的な意味を盛る歌として、この歌が、心ゆくばかりの情を盛っていることが看取されるであらう。」と説かれた。果して然らば、題詞の「河を詠める」は、必ずしも適切ではな

く、詠物歌とは言い難い。第一首目は、序詞に用いられた実景が大ざつばで描写力に乏しく、抒情的色彩が濃厚である。次の歌は詠物的であるよりも、その自然に対する真贋な態度からしても、むしろ叙景歌というべきである。

雲を詠める

痛足河 河浪立ちぬ 卷目の 齋槻が岳に 雲居立てるらし (7-1087)

あしひきの 山河の瀬の 響るなへに 弓月が岳に 雲立ち渡る (7-1088)

これらは、自然をよく凝視して山中の天候の変化を的確に捉えている。正に集中の叙景歌における尤なるものであろう。これらは、もちろん単なる詠物歌とは言えない。

雲を詠める

大海に 島もあらなくに 海原の たゆたふ浪に 立てる白雲 (7-1089)

この歌も、壮大な自然の光景を簡潔に緊張した調子で表現している。これもすぐれた叙景歌である。

以上のように、巻七の詠物題の歌は、題詞が内容に適切でないものが少なくない。これは、初め詠物題によつて作られなかつた作品をも、編者が詠物題によつて分類したものであろう。元来、巻七は巻三とおおむね編纂法に類似があり、制作年代もおそらく同じ頃のものであろうが、巻七は作者未詳の歌を収めているのであるから、巻三のように作品を年代順に排列することは困難である。そこで、本巻の編者は当時における進歩的な分類法である詠物題による分類法を試みたものであろう。すなわち

天を詠める (1068)	1 首
月を詠める (1069—86)	18 首
雲を詠める (1087—89)	1 首
雨を詠める (1090—91)	2 首
山を詠める (1092—98)	7 首
岳を詠める (1099)	1 首
河を詠める (1100—15)	16 首
露を詠める (1116)	1 首
花を詠める (1117)	1 首
葉を詠める (1118—19)	2 首
蘿を詠める (1120)	1 首
草を詠める (1121)	1 首
鳥を詠める (1122—24)	3 首
故郷を思ふ (1125—26)	2 首
井を詠める (1127—28)	2 首
倭琴を詠める (1129)	1 首

以上のように分類している。この中、「故郷を思ふ」という題は、他の題と形式が違う。これについて、²⁾武田博士は、「前後、詠物の題の中に、この題が介在しているのは不整頓である。事によれば、この2首は連作で、前の歌に千鳥が詠まれているから、前の詠鳥の題下に入るもので、この思故郷は、その題下の小題であるかも知れない」と説かれた。これに次いで、「芳野にて作れる」(1130—34) 5 首、「山城にて作れる」(1135—39) 5 首、「撰津にて作れる」(1140—60) 21 首、「礪旅にて作れる」(1161—1250) 90 首が存する。これは、これらが詠物歌の範疇に収めることの適当でないことを編者も認めて、これらを別類にしたものであろう。これにつく「問答」「時に臨める」「所に就

きて思を發せる」「物に寄せて思を發せる」は、いずれも古歌集、「行路」は人麻呂歌集の分類項目をそのまま襲用したものと思われる。「時に臨める」(1255—66) 12首はおおむね相聞歌であり、譬喩歌に入れるべきもの(1260・1261・1264)もあり、防人の歌とおぼしきもの(1265)もある。旋頭歌24首(1272—95)は、寓意をもたぬゆえに雑歌に入れたものであろう。かくの如く、本巻の雑歌の分類は、詠物を中心として、次に詠物に包摂することのできぬものを排列したものと見えよう。

次に、本巻において注意すべきは、譬喩歌が大量に存することである。集中譬喩歌は、短歌162首(この中、137番は左註に譬喩歌の類にあらずと記してある)・旋頭歌16首を収めているが、本巻には実に短歌107首、旋頭歌16首全部を収めているのである。しかも、短歌は、ことごとくその小題が寄物題によつて分類されているものである。

これは、当時すでに物に対する関心が高まつて来たことを示すものであろう。譬喩歌の存在は、かくて主客の分化が明確にならなければ望むべくもないのであるから、本巻に譬喩歌の多いことは、看過すべからざることである。

- 注 1) 武田祐吉氏 柿本人麻呂 P. 237~242.
2) 武田祐吉氏 増訂万葉集全註第六 P. 299.

II

前述のように、万葉集における詠物題・寄物題の出現は、邦人の物に対する意識の向上が認められるが、これを促したものとして、支那詠物詩の影響を考えなければならない。本巻の詠物題は、おそらく文選・玉台新詠集等に範を仰いだものであろう。¹⁾青木正児博士は、万葉集時代におそらく李嶠の詠物詩百廿首も伝来していたと思われると説いて居られる。これに従えば、万葉歌人は、直接初唐の詠物詩人の作品に触れていたかもしれない。

これとともに考うべきは、本巻における詠物題・寄物題の排列法である。これについては、²⁾すでに岩城準太郎氏が爾雅によつていっているのではないかと説かれた。爾雅は詁・訓・親・官・器・榮・天・地・丘・山・水・草・木・虫・魚・鳥・獸・畜の順に排列して居り、親・天・地・獸・畜などはさらにその下に種別を設けている。万葉の編者は果して、この排列法によつたであろうか。先ず、筆者が疑問を抱くのは、次の作の取扱い方である。

天を詠める

天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 榜ぎ隠る見ゆ (7—1068)

武田博士³⁾は、この歌を七夕の会の作であろうと説かれた。そうすると、この題詞は必ずしも適当ではない。「月を詠める」か「七夕」とでもすればできないことはない。現に次の歌は

月を詠める

天の海に 月の船浮け 桂楫 かけて榜ぐ見ゆ 月人壮子 (10—2223)

とある。また

七 夕

秋風の 清きゆふべに 天の河 舟榜ぎ渡る 月人壮子 (10—2043)

天の原 往きてを射むと 白壇弓 ひきて隠せり 月人壮子 (10—2051)

これらは、いずれも二星に関することなく、七夕の夜に月を見て詠んでいるのである。

本巻の編者が爾雅によつたとするならば、釈天の部には月陽・風雨・星名等が含まれているのであるから、「天を詠める」の中に、「月を詠める」「雲を詠める」「雨を詠める」を包含するか、または1068番の歌をわざわざ「天を詠める」とせず、次の「月を詠める」に入れたのではなからうか。次に爾雅では、丘が先にあり、山が後にあるが、万葉では山が先にあつて、岳がこれに次いで

いる。さらに爾雅では、积水の部に、水泉・水中・河曲・九河があるが、万葉では河と井との位置はかなり離れている。倭琴は积天の前にある积楽の部に入るべきであろうから、万葉において最後にあるのは、どうしたことであろうか。かくて、爾雅との直接の関係はないのではないかと思われる。

次に考えられるのは、類書の芸文類聚と北堂書鈔であるが、筆者は前者との交渉が深いのではないかと思う。本巻の詠物題に関係のある部分を挙げて見るに

卷一	天部上	天・月・雲
卷二	天部下	雨
卷七	山部上	山
卷八	山部下	丘
	水部上	河水
卷九	水部下	井
卷四十四	礼部四	琴
卷八十一	薬香草部上	
卷八十二	草部下	
卷九十	鳥部上	
卷九十一	鳥部中	
卷九十二	鳥部下	

上の如く、本巻の「天を詠める」以下「河を詠める」まで、その順序はまったく一致する。しかも、本巻冒頭の1068番の歌をわざわざ「天を詠める」としたのも、芸文類聚の序列によろうとしたことが推考せられる。本巻の編者が芸文類聚によつたとするならば、編者はその巻の部名を採らず、部中の物名を題としたのである。しかも、天の部では先ず「天」という題が必要だったのである。それゆえ、七夕の雅会で、2223・2043番の歌のように詠まれたであろう、本巻冒頭の1068番の歌を「天を詠める」としたものと考えられる。次の「露を詠める」は、水部に含まれるものとして、河の次に置いたものであろう。同じく水部の井が、これと離れて居る理由は解しかねる。李嶠詠物詩百廿首においては、井は居宅の群中にあるから、居処部(巻六十一、六十二、六十三、六十四)の序列に従つたものであろうか。倭琴が最後にあるのは、巻四十四、礼部四に倭琴がないので、この順に従わず、最後においたものであろうか。あるいは、自然物に対して、特に器物を分けたものであろうとも考えられる。これらによつてみても、芸文類聚との関係の深いことは否定できない。

詠物題に次いで、「芳野にて作れる」「山城にて作れる」「摂津にて作れる」「羈旅にて作れる」とあるは、編者が詠物の中にこれらを包含することの不可能になつたことを認めたのであろう。これは、文選において、物名・鳥獸等のほかに、畋獵・紀行・遊覧・江海等を分類しているに学んだのであろうか。さらに、「芳野にて作れる」「山城にて作れる」「摂津にて作れる」は芸文類聚巻六に州部・郡部があり、「羈旅にて作れる」は同じく巻二十七に行旅、巻二十八に遊覧、巻三十九に巡狩があるにヒントを得たものであろう。

当時の詩人は、漢詩人のそれぞれの詩集を見るよりも、芸文類聚等の詩の部を見れば、代表詩人の名品が分類掲載されていたものであるから至極便利であつたろう。それゆえ、これらが漢詩制作に際して参考に供せられたことは想像に難くない。それがさらに万葉の編集に影響を及したのである。

さらに、それらの影響は、和歌の詞句にも見られる。前掲の「天を詠める」歌(1068)に関連のあるものとして、「月を詠める」と題せる2223番の歌が考えられる。これらの歌は、懷風藻、文武

天皇の御製、詠月、「月舟移_二霧渚_一。楓徹泛_二霞浜_一。」と浅からぬ関係があるろう。中西進氏⁴⁾は、楚辞、九歌に「桂權兮蘭榭，斲水兮積雪。」の語が見え、「月舟」「楓徹」の源流をなしていると説かれた。上述のように、万葉の編集に類書の部類が影響を与えているとするならば、歌人が作品制作の場合にこれらをすでに利用していたことも考えられる。例えば、彼等がもし北堂書鈔をひもどけば、その一百三十七、八巻において、「桂月」「蘭世」が楚辞にあることを教えられ、また「瑤楫 抱朴子曰瓊艘瑤楫無涉川之用」、「雲榜 張華遊仙詩，雲榜鼓霧施」，「蘭權 曹植擬楚辞曰，運蘭權以速往」等の説明に接し得たであろう。それゆえ、和歌の制作にあつて、類書を介しての中国詩賦の影響を認めざるを得ない。

ちなみに、題詞には「詠」の字はないが、詠物詩の影響の認められるものに、次の如き作がある。

このごろの わが恋力 記し集め 功に申さば 五位の冠 (16—3858)

このごろの わが恋力 給らずは 京兆に 出でて訴へむ (16—3859)

これらの作は、自分の恋の異常であることを強調したもので、その点ではあるいは詠物的でないかもしれない。しかし、その発想に何か真贋ならざるものがあり、必ずしも自嘲の歌でもない。穂積の皇子の歌に

家_二ありし 櫃に鏢刺し 蔵めてし 恋の奴の つかみかかりて (16—3616)

右の歌一首は、穂積の親王、宴飲の日、酒酣なる時、好みてこの歌を誦して、櫃の賞と為し給ひき。

とあるが、この種の歌と同類のものと言えよう。官位を素材としたのは、芸文類聚、職官部六の「尹」(巻五十)、北堂書鈔、設官部、京尹(巻一百六十七)あたりにヒントを得たものであろうか。北堂書鈔には

正身奉職。正身率下。旌表異行。進賢尚功。優賢養民。進用善士。

とあり、これらによつたものかと思われる。これらの和歌の作者は、もちろん庶民ではあるまい。これらの官位を得る可能性のある官人の手になつたのであろう。そして、彼等の集会等において、これを発表して大いに喝采を博したものかもしれない。

このように、万葉の作品の詞句には、類書からの影響を指摘することのできるものが少なくない。それゆえ、その分類方法が万葉のそのの範とされることは、可能性が多いのである。

- 注 1) 青木正見氏 支那文学芸術考 P. 27~29.
 2) 岩城準太郎氏 万葉集の異国趣味 (万葉学論叢)
 3) 武田祐吉氏 増訂万葉集全註釈六 P. 299.
 4) 中西 進氏 万葉七夕歌について (上代文学七号)

III

次に、芸文類聚の分類、ならびに李嶠の詠物詩の題では、花・草・木・鳥の類はさらに細分されているのに、本巻では「花を詠める」「葉を詠める」「蘿を詠める」「草を詠める」「鳥を詠める」とあるのは、前述のように元来題名のない、または詠物題によらない歌を、本巻の編者が後になつて分類するには、かかる一括した名称による方が便利であつたのだらう。そして、この「花を詠める」以下の分類序列もおおむね芸文類聚のそれと一致していると言えよう。そして、この分類が後になつても行われたのである。

これに対して、寄物題の順序は何によつたものか不明である。これは詠物題の部分と編者を異にしているのではなからうか。詠物題の部分は、かなり中国の影響が認められる。ところが、「問

答」「時に臨める」「所に就きて思を発せる」「物に寄せて思を発せる」は、いずれも古歌集、「行路」は、人麻歌集の分類項目を用いている。もつとも、「問答」の部分は、その左註に、「鳥を詠める」(1251—52)、「白水郎を詠める」(1253—54)とし、むしろ、「鳥に寄する」「白水郎に寄する」とすべきを、しいて詠物題を付している。白水郎を題としたのは、玉台新詠集に、「詠少年」「詠美人」「詠歌姫」など人間を対象としたものがあるに学んだのであろうが、ここでは誤解によるものである。

しかし、「時に臨める」以下では、かかることは見出されない。そして、寄物題においては、詠物題とは異なり、かえつて器物を先にし、日本的な玉・日本琴・弓などが選ばれているのが注目される。これは、詠物題の場合とむしろ対蹠的な態度であつて、中国模倣の態度から脱しようとする意図の表れと言ふべきであらうか。古歌集や人麻呂歌集の分類項目の襲用もこれに一環する態度であらう。

詠物題や寄物題に対する認識が一そう高まつた跡が指摘できる巻十の分類方法では、芸文類聚のそれとはかなり異なり、自由な方法をとつている。大体、動物・天・植物・天・地、または動物・天・地・植物・地・天という順序で、整つていない。これは、巻七の寄物題の器物、植物・動物・天・地の順にやや近い。寄物の部分あたりで生じた自覚がさらに発展したものであろうか。

この問題について参考とすべきは、巻十に見える「鹿鳴を詠める」(2141—56)、「水田を詠める」(2219—21)等の題詞である。これらは、「鹿」「田」だけでも用は足りる。しかるに、何故に「水」「鳴」が必要だつたのであろう。

これらの考察に当つて挙ぐべきは、中国の詠物詩である。今、李嶠の作品¹⁾を見るに

鹿

涿野開=中冀-。秦原關=帝畿-。柰花開=旧苑-。萃葉吐=前詩-。

道士乘=仙日。先生折=角時。方懷=丈夫志-。抗=手別心期。

この詩では、動物の鹿は出て来ない。しかし、各句いずれも何らかの意味で鹿に関係があるのである。初句は史記に黄帝が蚩尤と涿鹿の野に戦つて、これを中冀に斬つたとある故事により、二句は漢書に「秦失其鹿。天下共逐之。」とあり、鹿をもつて帝位に譬えている。三句は鹿苑、または鹿林は仏成道の所であり、白馬寺に柰林あるによつて寺を柰園と称するによる。四句は毛詩に「呦呦鹿鳴。食=野之萍-。」をふまえている。五句は孫柔之端扈図に「黄帝時。西王母老子乘白鹿献白環之休符。有金方。」とある。六句は漢書朱雲伝に「五鹿岳岳。朱雲折其角。」とあり、朱雲が五鹿の充宗と易論して、しばしば言いこめたから、時人評して朱雲の強力能く鹿の角を折りぬとしやれたという故事による。七・八句は、孔叢子、子高の故事で、彼が鄭文・李節の態度を批判して、「人豈鹿豕也哉。而常羣聚也。」と言つた故事によつている。このような故事づくめの詠物詩が正格なものであるかないかは暫くおき、万葉の編者はあるいは反撥を感じたものであろうか。これらに異色を示そうとしていると見てよからう。とにかく「鳴鹿」としたのは注意すべきである。

この頃の 秋の朝明に 霧隠り 妻呼ぶ雄鹿の 声のさやけさ (10—2141)

さを鹿の 妻ととのふる 鳴く声の 至らむ極 なびけ芽子原 (10—2142)

上においては、確かに鹿の鳴声そのものに興味をもっている。これらは想像による作であるが、鹿の声に秋の風物を美的に配することによつて美しい秋の世界を創造している。前掲の鹿の詠物詩のこちたき故事の過剰に比すれば、日本的な簡素な美の世界で、正しく「鳴鹿」の題にふさわしい。次の

田

貢禹懷=書日。張衡作=賦辰。杏花開=鳳吟-。菖葉布=竜鱗-。

瑞麦両岐秀。嘉禾同穎新。寧知帝王力。擊壤自安貧。

この場合も、それぞれ扱るところがある。すなわち、初句は貢禹が上書して田百畝を売ろうとした漢書の記事により、二句は後漢の張衡が帰田賦を作ったことによる。五句は後漢の張堪が漁陽の太守と為つて農耕を勧め、百姓が繁栄した故事、六句は尚書伝「唐叔得禾異畝同穎。」により、また孔伝「異畝同穎。天下和同之象。」疏に「後世同穎之禾名嘉禾。」によつている。七・八句は堯紀の鼓腹擊壤の故事によつていることは明かである。何の関係も無さそうな杏花や萱葉も、月令・呂氏春秋によつて、農耕の時期を示すものとして挙げられているのである。よつて、水田の実景に触れたものは、ここでも見出されない。中国の詠物詩は種種巧思をめぐらし、主題たる品物を露出せず、しかもそれに帰一してゆくことに興味を感じた結果、このような方向に進んだものであろう。本集の「水田を詠める」では

あしひきの 山田作る子 秀でずとも 縄だに延へよ 守ると知るがね (10-1353)

さを鹿の 妻喚ぶ山の 岡辺なる 早田は刈らじ 霜は零るとも (10-1354)

前者は類歌が卷七「稲に寄する」と題して、「石上布留の早田を秀でずとも縄だに延へよ守りつ居らむ」(1953)とあつて、両者の間に類似が認められる。この歌は譬喩歌らしい詠みぶりでありながら、山田の実状から離れていないことは注意すべきである。後者は妻を呼ぶ鹿に同情して、その立ち寄るあたりの田を刈るまいというのであるが、おそらく農民の作ではないだろう。相当に趣向をこらしてはいるものの、やはり水田から離れていない。これも「鹿」に対して「鳴鹿」としたように、「田」に対して「水田」として、彼に対して異色を示そうとしたものであろうか。実際の事情には必ずしも即していないが、全然水田から遊離してはいなし、風物を美的に結びつけて風雅ともいふべき世界を構成しようとしているあたり、万葉人独自の詠物的意図を看取することができるのである。

注 1) 李嶠の作品は、戸崎允明注の李嶠詠物詩解(静嘉堂文庫蔵)の本文によつた。

IV

以上のように、卷七の編者の詠物詩に対する態度には二つの対蹠的なものが認められるのである。すなわち、前者は詠物詩に対して、無批判に範として仰ごうとして居り、後者は批判的にこれに対してしているのである。そしてこれが、万葉集卷七、卷十の詠物題・寄物題の分類にも表われているのである。卷七の詠物題の前半の部分は前者に属し、後半以後、および寄物題の分類、さらに卷十のそれは後者に属する。それゆえ、卷七においては、相異なる編纂態度が認められる。これは本巻の編者の詠物詩に対する見解の推移によることは多言を要しない。しかし、その編者が同一人あつたか、または別人であつたかは明かではないが、おそらく時を異にし、人を異にする編者の態度によると見ることが穏当であると思う。

(33. 4. 30)